

造形表現を通して感性豊かに生きる－教師の役割と環境づくり－

同志社女子大 学現代社会学部

現代子ども学科教授

教授 竹井 史



会場参加の様子



リモート参加の様子

私は幼少期の頃から様々なものに興味をもち、ものづくりをしてきた。その経験を振り返ると「道具（用具）のダイナミズム」に魅せられた10年間だった。子どものものづくりは、もっとダイナミックなもので、もっと生活に密着していて、おもしろかったのではないだろうか。

◎ 「図工・美術と感性～子どもの絵の世界を少し～」



「かけっこの絵」一つ目の作品は運動会のかけっこのゴールの場面である。太く描かれたゴールテープは、子どもの表現ではなく、大人の手が加わっているものである。子どもたちが絵を描いたら、だいたい1本の線だけ。赤ですうっと引く。それを先生が「これだったら迫力がないから」「もっとゴシゴシやり(なさい)」と言った。クラスの子は(みんな)ゴシゴシと書いた。中には下の線が見えるものもあった。

「玉入れの絵」

ここにも線がある。ポイントは上のブルーの線と下の白く見える線。これは、運動会の玉入れで、玉を入れようとしたら、ほっぺたに冷たい風が当たった。玉をとろうと思ってしゃがんだら暖かい風が当たった。ここで描かれた線は、子どもたちの運動会の時に吹いた風の表現です。

「にんじんの絵」

普通に考えたら観察画。よく見て描いている、と思いがちだが、実はこれは想像画。自分

たちで育てようとしたにんじんは、虫に食われてしまい、みすぼらしいにんじんになった。子どもたちは落胆した。そこへ先生が来て「どんなにんじんがあったらいい？」と聞いた。子どもたちは「もっと太っちゃよで、葉っぱがあるのがいい。」と答えた。先生は「じゃあ、そのにんじんを描いてみよう」と言った。この絵は、そのやせたにんじんを見て描いた絵です。 見えているものが必ずしも真実であるわけではない。

表現（絵）とは何だろう。表現（絵）は何のためにあるのだろうか。見えているものは必ずしも真実ではない。一つの考え方として、表現とは「自分の中にある真実、自分のものの見方・感じ方を表すためのもの」ではないのだろうか。そんな子どもたちのために、私たち教師は何ができるのだろうか。それは、子どもたちが自己実現をしていく中で、すべて子どもの「感性」を豊かにすることではないだろうか。

○ 学習指導要領と感性

今回の改訂では、図画工作の資質能力が「造形的な見方を働かせ・・・」となっている。「感性」という言葉はこの中にはない。中学校についても「感性」という言葉はない。

「造形的な見方感じ方」の中に「感性」が出てくる。造形活動をすることによって、感性を豊かにできる可能性がある。

○ 「感性」とは何か

感性とは何かと問われると多くは「感じる力」という人が多い。もちろん言葉としては間違っていない。感性とは豊かに感じる力だ。しかしそれだけではない。感性に関する研究グループのまとめによると、「感性にはいくつかの働きがある」とされている。

一つ目として感性とは、人間が五感をもとに内的・外的な世界をとらえる能力。感性とは、目の前にある世界だけではなく、心の世界もとらえる能力。能力と定義されていることが大切。能力ならば教育可能である。個性(身長などその子らしさ)は教育できない。引き出すことはできるが、個性を教育の対象とすることは考えにくい。私たちにできるのは、子どもたちの感性を豊かにしていくこと。造形美術でメインになるのは五感のうち「視覚」と「触覚」。「色や形」ということで、資質能力は明確にされたが「触覚」という部分が抜け落ちつつある。「色や形」は研究テーマになっていくが「触覚」は失われつつある。時代的な流れもあるが、重要視していくところでもある。



二つ目として「感性」とは、子どもたちが自分の思いの中で選択し、自分にとってのかけがえのない世界をつくりあげる能力である。同じテーマで絵を描いても、子どもによって描き方も違えば感じ方も違う。「感性」というものは、受け身な力ではなく主体的・積極的な力である。

○ 学習指導要領と「感性」の関係

学習指導要領と「感性」の関係を見ていくと、「造形的な見方・考え方」の中に「感性や想像力を働かせ、対象や事象を、形や色などの造形的な視点でとらえ、自分のイメージをもちながら意味や価値をつくりだすこと」とある。では、いったい「感性」とは何なのだろう？一つは、「感性」とは、「人間が感覚（五感）をもとに内的・外的な世界をとらえる能力」である。ここで大事なことは、目の前にある世界だけでなく、心の世界も捉える力をもっているということ、そしてもう一つ大事なことが「能力」と定義されていることで、能力とは教育可能なものだということである。逆に「個性」は生まれ持ったもので教育することはできない。

造形のなかでの「五感」とは、主に「視覚」と「触覚」である。学習指導要領に明記された色や形である「視覚」とは裏腹に、「触覚」という部分が抜け落ちているのではないだ

ろうか。そこを私たちは重要視していく必要があると思う。

そして、「感性」のもう一つの側面として、「感性」とは、共感できる能力であるということが言える。すべてを感じ取るのではなく、選択し自分にとってかけがえのない世界を作り上げる能力。同じテーマでも、子どもたちの描き方は違ってくる。感じ方も違う。それはどういうことかという、子どもたちの感性は、とらえるものが全然違っている。感性は、受け身な力ではなく、むしろ主体的・積極的で、感性を働かせることで主体的に自分の世界を作り上げていく能力である。この三点が、現状において「感性」についての研究でまとまっている意見と言えるのではないか。

○なぜ感性が大切なのか

では、なぜ感性が大事なのか？「感性」と対になる言葉は「知性」である。この連動を意識しておかないと、「感性」の本当の意味は分からなくなってしまう。「知性」と「感性」



の関係を一本の木に例えると、「感性」とは自分という木が成長するために必要な大切な養分を選択的に吸収し、その結果として木が成長していった実ができてくる。その中で「知性」というものが育っていくのだということ。ここで大切なことは、「感性」だけ「知性」だけで育っていくのではなく、両者は連動しているのだということである。なので、本当の「知性」を身に付けるためには、「感性」の裏付けがなくてはならない。

では、子どもはどのように育つのか？こんなシーンを思い浮かべてほしい。幼児が一生懸命チョウを見ている。チョウがきれいだなと思うのは、「感性」を働かせていると言える。その次に、幼児は先生に「あのチョウは何という種類のチョウだろう。」と聞く。あるいは、図鑑で調べてみる。これは、「知性」を働かせていると言える。また、次の日別のチョウを見付ける。あの模様の違う変わった羽のは何だろう？興味関心をもって見ることは「感性」を働かせている。今度は飼いたいと思ったら、何を食べるのかを調べる。ここで「知性」が働く。このように、「感性」と「知性」は連動している。「きれいだな」「面白いな」と感じることで「感性」が働き、それに基づいて造形活動というものが行われているのである。

私たちが考えておかななくてはならないのは、「感性」というのは「知性」の土台になっているんだということ。力強い知性を育てるためには、感性という豊かな根っこを張らせることが必要なんだということである。

私たちが学校教育の中で、子どもたちの「感性」にこだわる理由というのは、「知性」のある子どもたちを育てていくために、「感性」を育てることが大事なんだということ。そして、私たち造形という領域が、「感性」を育てるのに重要な領域であるということである。特に、触覚的なものを育てる領域は他にない。だから、私たちもそこを注視して教育していかなければならない。



○ 感性豊かに生きれる環境づくりについて

子どもたちが「感性」を働かせて表現をしていくことを支えていくためには、どのような描画材（環境）が必要なのか。それは、子どもたちがどのような表現をしたいか、何を表現したいかによって描画材（環境）は変わる。例えばクワガタのギザギザしたところを表



現するには、鉛筆や色鉛筆、サインペンなどが
必要だといえる。

ザリガニの甲羅の色を表現したいなら絵の具、
というように一律の描画材があればいいのでは
ない。複合的に題材に合わせた描画材の環境を
整える。夕日の美しさを表現したい子にパスだ
け渡しても表現できるはずがない。子どもたち
の表現するものに合わせて、環境をどうしてい
くかが大切。感性が大事だとか、子どもの感性
を働かせることが大事だというのが、働かせるた
めの環境作りがベースになる大事なこと。子ど

もたちの言いたい思いや願い、経験に合わせて表現の形式が変わっていく。子どもが何を
表現したいかによって、私たちは描画材を整えていく。子どもの描きたい思いに寄り添う
ことで描画のための環境が決まる。

次に、紙の強度について考えてみる。紙には目があるので、使う方向によって強度が変
わる。また、絵の具でポリプロピレン製品をスタンプングする。すると、絵の具をはじい
てしまうが、中性洗剤を入れるときれいに色が乗る。そういうところまで気を使えるとい
うことが、私たち教員の専門の仕事なのではないだろうか。

題材のねらいや子どもの思いによって補助教材の環境は変わってくる。

図工・美術の適切な環境づくりによって感性を豊かに育てていきたい。